

山形大学大学院社会文化システム研究科紀要 第六号 別刷

平成二十一年八月

中近世の仏堂墨書と地域社会

—天童市若松寺観音堂墨書の調査をふまえて—

三 上 喜 孝

中近世の仏堂墨書と地域社会

—天童市若松寺観音堂墨書の調査をふまえて—

三 上 喜 孝

(文化システム専攻歴史文化領域担当)

はじめに

筆者はさきごろ、天童市の若松寺観音堂（重要文化財）の内部にある、戦国時代末期から江戸時代初期（一六世紀後半～一七世紀前半）にかけての参詣者の「落書き」（以下、「仏堂墨書」「楽書」と記す場合がある）を調査する機会を得た。この調査の過程で、これらの落書きが一六世紀末から一七世紀前半に集中していること、そして、山形県内の他の仏堂のみならず、同時代の各地の仏堂に書かれた落書きと共通した様式をもっていること、などが明らかになり、中近世の仏堂の落書きが、歴史資料としてきわめて重要な意味をもつことを実感した。調査成果は、二〇〇八年三月に調査報告書としてまとめられた¹⁾。

中世の仏堂に書かれた「落書き」を歴史資料として評価する試みは、これまでになかったわけではない。まず思い浮かぶのは藤木久志氏の一連の研究である。藤木氏は、新潟県の東頸城郡松代町の松亭神社、東蒲原郡阿賀町（旧鹿瀬町）の護徳寺観音堂、同町（旧三川村）の平等寺薬師堂など、新潟県内に残る中世仏堂の落書きに注目し、そこに戦国時代の人々の心性をみている。松亭神社の墨書は永正四年（一五〇七）の年紀を含む、一六世紀前半にはじまるもので、後の二堂の墨書は、一六世

紀後半から一七世紀前半を中心としている。藤木氏はこれらの落書きを紹介した後、次のように述べる。²⁾

村はずれの神社や仏堂は、「泊り客人規制」を大法とする戦国の人たちも、広く世間に開かれていたらしい。そこを一夜の宿とした旅者の数をはじめ、旅の目的や祈りや願いごと、さらには感慨の和歌から世俗の雑念までを、気ままに筆で書き重ねていた。

そうした旅のかたみの落書きは、そこに宿るみ仏や神々に寄せる、結縁のしるしでもあったに違いなく、僻地といわれる越後山間の堂社の落書きにも、戦国びとの信仰の旅の世界が大きく広がり、お籠りの習俗も新鮮な断面をみせてくれる。さらには、中世には盛んであった男色の風も、落書きならではの素顔をのぞかせる。

これらのうち、阿賀町に所在する観音堂、薬師堂の墨書資料については、『新潟県史 資料編4』に収められているほか、近年では『東蒲原郡史 資料編2』に鮮明な写真と詳細な翻刻が掲載された。また、小林昌二・相沢央編『新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅱ 護徳寺観音堂墨書集』同『新潟大学大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅲ 平等寺薬

(1) 『若松寺観音堂墨書調査報告書』天童市教育委員会、二〇〇八年三月。

(2) 藤木久志「村堂の落書き —『忘れられた霊場』に寄せて—」『戦国の作法』平凡社ライブラリー、一九九八年、初出一九八九年。

『師堂墨書集』(ともに二〇〇四年二月)にも鮮明な写真が掲載された。中世仏堂の落書きとして著名なこの二カ所の資料群が、広く公開されたことの意味は大きい。

また、建築史の立場からは、山岸常人氏が、仏堂の墨書の特徴として、早い例では一四世紀、一般的には一六世紀に仏堂の内部に参籠者が入り込んでいた事実がうかがえること、その参籠者は僧俗を問わず廻国の巡礼者であったこと、そしてその参籠の場は、堂蔵・後戸周りが多く、内陣・礼堂でもみられ、とくに小規模堂では内部全体にわたって墨書がみられ、参籠者の活動の場に制限のないことがうかがえることを指摘している³⁾。中世の仏堂墨書についての基本的な傾向をとらえたものといえるだろう。

筆者は、調査の過程で、こうした研究にも触発され、これまで断片的な形でとらえられてきた仏堂の落書きを、歴史資料として活用し、当該期の地域社会における信仰や交流の実態をさぐる有益な資料群として位置づけることを模索した。その結果、戦国末期から近世初頭にかけての仏堂の落書きが、地域社会の信仰や交流の実態を知るための素材としてだけではなく、きわめて多様な情報を含んでいることを確認した。

本稿では、若松寺観音堂の調査で得られた知見をふまえて、いまいちど、仏堂墨書の資料的な意義と、それを地域社会研究に活かす視角について、まとめておくことにしたい。

一 仏堂墨書の地域性

若松寺観音堂内部の落書きは、屋根裏と堂内(内々陣、内陣、外陣)にみられる。大まかに分類すれば、屋根裏の梁や束柱などに書かれたも

のは、大工や屋根葺き職人による落書きで、堂内に書かれたものは、参詣に訪れた人による落書き、ということになる。

観音堂の落書きは、これまでも断片的に紹介されてきたが、二〇〇七年度、天童市教育委員会を事務局として、若松寺観音堂墨書調査会が発足し、仏堂墨書の全面調査が行われた。田川新一朗氏(東北芸術工科大学、当時)により、屋根裏と堂内の赤外線写真撮影が行われ、その写真にもとづき、釈読作業を進めた。

このうち、屋根裏に残っている墨書のほとんどが慶長十六年(一六一一)の観音堂修理工事の際に大工によって書かれたものであることが判明し、それにより、改修工事の時期を特定することが可能となった。屋根裏に書かれた年紀をまとめると、慶長十六年六月十日から二十日ころにかけて集中していることがわかった。

このことは、堂内の墨書の上限年代にも手がかりを与えることになった。すなわち、内々陣、内陣、外陣の壁や柱に残された参詣者による落書きの多くは、おおむね慶長十六年の改修以降に書かれたものとみてよいのである(永禄六年(一五六三)の「板絵著色神馬図」に書かれた落書きは除く)。

ただし、その後も度重なる改修工事が行われたため、現在の観音堂は必ずしも慶長十六年当時の状況をとどめているわけではない。とくに壁面の羽目板は、部分的に新しい板材を用いたり、古い部材を移動して再利用している箇所もあるため、現存する墨書がもとの位置をとどめていない可能性があることに注意しなければならない。

(3) 山岸常人「中世後期の仏堂の世俗的機能」『中世寺院の僧団・法会・文書』東京大学出版会、二〇〇四年。

(4) 若松寺観音堂墨書に言及した論考、報告は以下の通りである。
 醉古庵主「若松観音堂の「落書」を覗く」『羽陽文化』三号、一九四九年
 藤島亥治郎「羽陽古建築再訪記」『羽陽文化』二二号、一九五四年
 『重要文化財若松寺観音堂修理工事報告書』山形県、一九六九年
 『山形県史 古代中世史料2』一九七九年
 野口一雄「若松寺観音堂落書」から見えるもの」『村山民俗』二二、二〇〇七
 年六月

さて、まず屋根裏の梁や束柱に書かれた墨書をみると、大部分が、慶長十六年六月に大工によって書かれたものである。「ぬき」「はりま」「ゆきま」などの、部材を説明する墨書も多くみられるが、ここで注目したいのは、大工が自らの名を記した墨書である。

- ・ 山べ「」 「慶長十六年六月十二日
- ・ 山へ十人高はし新兵衛「かた見かた見
- ・ 天とう山へ村大く「高はし木左衛門
- ・ おいのもり ひうき左右門家「慶長拾六年六月廿日
- ・ 山形大工遠藤□内「書之
- ・ のへ「さわ」住人「□□」□□「二」郎「かた」見、々、々「慶長」十六「年」六月「十日
- 新助「慶長」十六「年」六月「十二日」大く「天と」弥乃「ちゃ」新「助
- ・ 「」 「慶長拾六年六月十日大く
- ・ 天と「う」のへ「ちん」た「かた見」、 「慶長」十六「年」六月十八日「□□」たく
- ・ 慶長拾六年六月十八日「か見、々、

居住地、氏名、年月日などが書かれる場合が多いが、これらによれば、大工は天童の山家、老野森などのほか、山形、延沢などもみえる。すなわちこれらの墨書により、おおむね、天童を中心とする村山地方の大工が関わっていたことがわかる。

ところで、屋根裏には慶長十六年を中心とする落書きのほかに、明和七年（一七七〇）に屋根を葺き替えた際の、屋根葺き職人たちによる墨書も残っている。

- ・ 屋根ふき 人数左之通「下野目村 郡七」右同村 源左エ門「清水村 八五郎」小栗山村 助太郎「鹿原村 喜助」小泉村 長治郎「同村 助藏」長清水村 仲藏「沼ヶ袋村 八□□」右之通御座候並

二「御貢情有之候と□□」指南御使可被下候以上」とら四月より相始申候

・ 仙台加美郡小泉村「助成葺替御書之」明和七年五月十日
 ・ 明和七年「奥州加見郡長清水」明和七年葺替「之御書之

この落書きは、『重要文化財若松寺観音堂修理工事報告書』（山形県、一九六九年）でもすでに紹介されていたが、釈読に誤りや不明な点が多かった。今回、職人の居住地である村名のすべてを判読でき、それらが、いずれも宮城県加美郡の「軽井沢越仙台街道（最上街道）」沿いに分布する村であることが判明した。これにより、明和七年の屋根葺き職人たちが、加美郡の各村から、軽井沢越仙台街道を通過して若松寺にやってきたことが明らかとなった。「四月より相始申候」「葺替御書之、明和七年五月十日」と書かれていることから、雪どけを待って天童に訪れ、四月から屋根の葺き替えを開始し、五月十日に終了したのであろう。さらに興味深いことに、若松寺文書によれば、享保十一年（一七二六）の葺き替えの際にも、「仙台寒郡長清水村」から職人がやってきたことがわかる。

○「観音堂屋根替届」（若松寺文書 東村山郡史卷之二）

一、往古山形出羽太守源義光公御違例二付、祈病ノ御立願成就之後為謝礼、慶長十六年御堂御建立被成候。一切普請御奉行高揃館主斎藤伊予守、本尊御遷座導師山形柏山寺被仰付相勤候由、其節之別当山形柴来畔院玄真代、其以後幾度茂葺替有之相続来候。

一、今般悉零落を痛入、当処実乗坊良弁種々才覚働二而、御本堂並拝殿迄葺替仕畢。

享保十一丙午年六月四日

- 別当来畔院宥朝代 子息 治部卿良賢
- 如法堂英祐
- 福性院英繁

願主 実乗坊良弁

役人 円行坊宥昌

庄屋 斎藤次郎兵衛

屋根葺仙台東郡長清水村

一喜平次 一七内 一喜助

一権内 一五郎七 一五助

一甚之平 一半兵衛 一甚五兵衛

一五郎七 一喜八郎

天童組

高木組 百姓中

山口組 人足手足

いにしゑの果報いみじき人の名は

仏閣神社に残りこそすれ

明和七年のみならず、享保十一年にも加美郡から職人がやってきたことを考えると、屋根の葺き替えの際には、恒常的に加美郡の職人がやってきた可能性がある。なぜ、わざわざ加美郡から屋根葺き職人がやってきたのかは不明だが、職人の活動範囲の実態を知る上で興味深い資料といえるだろう。

次に堂内の参詣者による落書きに注目しよう。「上山杵山」「中野」(以上、永禄六年の「板絵著色神馬図」「天童住人」「ひがしね」「山形住人」「蔵増住人」「羽州村山郡上桜田村」(以上、堂内)など、基本的には天童をはじめとして、村山郡内の地名が最も多い。ただし、中には「雲州住」という落書きが一点みられ、出雲国からも若松寺観音堂に訪れたようである。

だが、他地域から参詣に訪れることは、さほど珍しいことではない。県内の他の仏堂墨書の例をみると、

・松尾山観音堂(山形市蔵王半郷)「ひたち下たて住人」(『常陸国下館

住人)

・正善院黄金堂(羽黒町手向)「気仙郷住人」(『陸奥国気仙郡気仙郷)

・観音寺観音堂(白鷹町)「関東」下総」之国」下まつ」十人」やくち

与三郎」七月十四日」(『下総国)(西側中央間飛貫内面刻書)

という例も確認できる。むしろ若松観音堂では、割合からいえば天童を中心とした村山郡内の住人の落書きが多いように思える。たしかに遠隔地から参詣に訪れた人がいたことは事実だが、参詣者の多くは、やはり地元の人間だったのでないだろうか。

二 仏堂墨書の普遍性

工人や参詣者たちの書いた落書きから、修理や参詣に訪れた人々の出身地や居住地がわかり、それにより、寺院を媒介にした当該期の地域間交流の実態が個別具体的に明らかになることはたしかに重要である。しかしながら、こうした地域間交流の実態は、これまで知られていた仏堂墨書でも確かめられていたことであり、それ自体、仏堂墨書研究に新たな知見をもたらすものとは言いがたい。むしろ、仏堂墨書がそれ以上に、地域社会を超えた普遍性をもっていることに注目すべきである。

こうした点から興味深いのは、記載様式の類似性である。すでに指摘したように、一六世紀後半から一七世紀前半の参詣者の落書きには、居住地や人名を記した後に「かたミかたミ」と記す事例が数多くみられるのである。

〔若松寺観音堂〕

・はせ川神五郎」か藤」太郎二郎」青柳□」惣九郎かたミかたミ」

進藤助五郎かたミ」(内々陣「板絵著色神馬図」墨書)

・上山 杵山かたミかたミ」(内々陣「板絵著色神馬図」墨書)

・神すけ」かたミかたミ」(内々陣)

・小野」長作殿」かたミ」かたミ」(外陣)

〔石行寺観音堂〕(最上三十三観音第七番札所、山形市岩波)

・横さハせん七郎「かたミ」成さハそくない「津嶋主馬」かたミ」
再回(後略)(内陣絵馬下方板壁墨書)

・「当所 たなか」うし かたミかたミ」くさりたつ かたミかたミ」八月十日「天正廿一年」とく殿「様ひくわん」正楽寺仁位公「かたミかたミ」(内陣西側板壁)

・中野住人「川村や八郎」かたミかたミ」(内陣西側板壁)

・中野住人「いた」かきひ小七」かたミかたミ」(内陣西側板壁)

〔武田喜八郎〕『石行寺観音堂の落書について』石行寺、一九八九年

〔松尾山観音堂〕(最上三十三観音第九番札所、山形市蔵王半郷)

・六月廿九日「上山□□」なかみね八郎女「天正十九年」かたミかたミ」

・ひたち下たて住人「石神ひこ四郎かたミかたミ」大せき忠八たそ

□「山寺一見之時同」道五人「慶長十四年」九月十一日

〔旧松應寺観音堂保存修理工事報告書〕

〔金峯神社本社〕(鶴岡市青龍寺)

・元和四年五月廿五日書之「もがみ山がた住人 佐藤兵右衛門 かた見かた見」只今ハ庄内鶴岡に居申事に候(内陣の板壁上部)

・元和四年六(月)廿五日「天野治右(衛)門」書之也「かたミかたミ」(紅梁)

・元(和)七年夜通「辻郷左衛門は」高山六蔵御御下人「さとみ内蔵介は」せの尾みの千代「さま下人」片見片見

〔鶴岡市史資料編 荘内史料集一・二 古代・中世史料下巻〕二〇〇四年)

〔正善院黄金堂〕(鶴岡市手向)

・慶長拾九年「六月十九日」気仙郷住人「金の雄作かたミかたミ」
気仙郷の住人「齋藤う衛門」かたミかたミ」同道廿仁人也」

〔山形県史 古代中世史料2〕

〔観音寺護徳堂〕(新潟県阿賀町)

・日出谷の「住人井口」彦六書之也「かたミかたミ」悪筆候へ共かき申候「かやうに申ハ日出谷之住人也」左衛門尉五郎殿下人「八郎右衛門尉□□□」かたミかたミ」

〔東蒲原郡史 資料編2〕

〔平等寺薬師堂〕(新潟県阿賀町)

・石井小七郎かたミかたミ生年廿才「慶長□年書之

〔東蒲原郡史 資料編2〕

このように、住所、氏名、そして最後に「かたミかたミ」というフレーズが書かれる。参詣の何月日や年齢が記されることもある。

「かたミかたミ」というフレーズは、参詣者ばかりが書いたわけではなかった。屋根裏に落書きを書き残した大工たちも、「かたミかたミ」と書き記している場合がある。

では、この「かたミかたミ」というフレーズは、なぜこれほどまでに爆発的に各地で書かれるようになったのであろうか。ひとつ参考になるのは、江戸初期に作られた、次の狂歌である。

観音の堂に打ちふるらく書をかたみに残す諸国順礼(池田正式)

〔堀川百首題狂歌合〕『狂歌大観』所収)

池田正式(生没年不詳)は、江戸前期の俳人、狂歌作者で、寛文年間(一六六一—一六七三)にかなりの高齢で没したと推定される。この狂歌には、一七世紀前半の段階で、観音堂に書いた「らく書」は諸国巡礼の者が「かたみ」に残すためであったとはっきり歌われている。当時の巡礼者たちが、こぞって落書きをするのは、それを「かたミ」に残すためである、という意識が存在したことを、この歌は明らかにしている。

では何を「かたみ」に残すと考えていたのだろうか。先ほどあげた若松寺文書の最後に「いにしゑの果報いみしき人の名は仏閣神社に残りこそ

すれ」という歌が記されている。仏堂を修理した大工や参詣した巡礼者たちが、自らの名を堂内に書き残すことを「かたミ」と称していたのではないだろうか。

仏堂墨書の普遍性を考える上で、実はそれ以上に驚くべきことがある。全国各地の仏堂に、同じ歌が落書きされているという事実である。前稿と重複するが、重要な論点と思われるので、ここで落書きされた歌の広がりを確認しておこう。

若松寺の観音堂墨書の釈読を進めていくうちに、仏堂内に落書きされた歌の中に、同じものが書かれている例があることに気がついた。

〔若松寺観音堂〕

・かきおくもかた「みとなれやふて乃」「(内陣)

・爰元壺見之時書之「□□らむ□□きのかたみとな」□□一ふてかくなむかき「おくもかたみとなれや」ふてのあと□□らむあ□□かたみ、々、(内陣)

判読不明なところも多く、これが和歌の一節であるかどうかはここからだけではわからないが、同様のフレーズをもつ歌が、若松寺観音堂納札の中に見える。

「慶長拾七年六月廿七日書是 乍悪筆形見也

奉納於出羽国立石寺 後藤喜右衛門(花押)

書をくもかたみとなれや筆のあと我はいつくの

つゆとなるとも

〔山形県史 古代中世史料2〕金石文二二八号(三二六頁)

若松観音堂に書かれた落書きも、「書をくもかたみとなれや筆のあと我はいつくのつゆとなるとも」という歌を意識したものであることは間

違いない。納札にみえる慶長十七年という年紀も、観音堂に残っている一連の墨書の年代と重なっている。

この「かたみとなれや筆のあと」の歌は、山形県内では他に松尾山観音堂にもみえる。

〔松尾山観音堂〕(山形市蔵王半郷)

けい「十六年」山「三」山のへ「拾人」村山「拾蔵」かたみ、々、々、々、五月十二日「成沢十人」そう二郎「かたみとなれ」やふてのあとわ「れやいすく之」つちになるらん「五月二日」なるさわ十人「大にん」かたミかたミ(内陣内方南面)

〔山形県史 古代中世史料2〕に未収録。『旧松應寺観音堂保存修理工事報告書』所収)

さらに同様の和歌は、新潟県の護徳寺観音堂や平等寺薬師堂にもみえる。

〔護徳寺観音堂〕(新潟県阿賀町)

・新春之「新春之御吉兆」此度「何方も御目出度」床敷可存候「かきをくもかたミと」なれや筆のあと「われやいつくのうらに」すむともこれをかく「天正廿式年(仏壇東外側前間第一羽目板)

・若もし「さま恋しや」のふ、々、「かきをくも」かたみとなれや「ふてのあと」我等いつくの「つちとならはや(仏壇東内側前間)

〔平等寺薬師堂〕(新潟県阿賀町)

・□□□たみとなれや「筆のあと我なるやばい」□□□ひとりまかるらん「明暦式年」申卯月九日(内陣東側面後間)

・慶安四年「卯月□□日」みし□□□「かたみと」なれや「筆のあと」我はいつくの「つちと」□□らん(背面西脇間、第二羽目板)

これらの歌には、年紀が並記されているものもあり、それぞれ天正二二年(≡文禄三年、一九五四年)、慶安四年(二六五)、明暦二年(二六五六)のものと確認される。

(5) 三上喜孝「仏堂墨書の世界」注(1)報告書所収。

なお、護徳寺観音堂には、「書をくかたミとなれる物の 御覽候時のかたミともせむ 此分候共清七書之」という墨書もあり（東側面中央間北柱）、「書をく」「かたミ」が歌の一節と一致している。

さらにこの歌は、四国八十八箇所の札所にも落書きとして書かれている。高知県高知市の四国三十番札所善楽寺には、元龜二年（一五七一）のものとして、次のような楽書が紹介されている。⁶⁵⁾

土佐の一の宮にて…何共やとなくて此宮にとまり申候、かきをくも
かたみとなれや筆の跡我はいつくの土となるとも 元龜二年六月五日
日 金松

これらは、後半が「露となるとも」「土となるらん」「土とならばや」など、微妙な違いはあるものの、おおむね同じ歌を書いたものと考えてよい。

なお、山岸常人氏が紹介している滋賀県甲賀郡石部町の善水寺本堂の内陣にみえる大永三年（一五二三）の墨書も、この歌と関わる可能性がある。⁶⁶⁾

一七日一時に□□□置候て参籠仕候
かきおくも
ぬ□れふしも
なからんふミのかたみ□
なれし
大永参年卯月七日より一七ヶ日参籠仕候
(後略)

完全に一致しているわけではないが、「かきおくも」「かたみ」の語が共通している。

このように、「書きおくもかたみとなれや筆のあと我はいつくの土と

(6) 前田卓『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房、一九七一年。

なるらん」という歌は、一六世紀後半から一七世紀前半にかけて、全国の仏堂墨書を通じて広がりを見せていたことがわかる。

だが、この歌はとりたてて有名な歌だったわけではない。『国歌大観』にも収められておらず、管見の限りでは作者不明の歌である。

また、この歌が墨書された年代には幅があり、おおむね一六世紀後半から一七世紀前半という時期におさまる。一人の人間が各所で書いたというわけではなく、おそらくは巡礼をする多くの人々の間でこの歌が共有されており、およそ一〇〇年にわたって、全国の巡礼先で墨書されたことが推定できる。

この歌の広まりは、これだけにとどまらない。興味深いことに、一九世紀になると、まったく同じ歌が大隅地方（現在の鹿児島県）に（ある物語とともに）伝えられていることが確認できる。

天保一四年（一八四三）に完成した『三国名勝図絵』（薩摩・大隅・日向三国の地誌）巻之三十五には、次のような記載がある。⁶⁷⁾

敷根
薬師堂 慶長四年荘内伊集院忠真を御征伐の時兵士此堂に集り各其志を述て文句を前後左右の板壁等に題しける其内平田三五郎宗次は姿容秀麗にして美少年の名高かりしが年十六にて従軍し此堂に來りしに衆人既に題書して其板壁の低き処は書すべき隙なかりければ家丁に棒持せられて其最高の所に自詠の和歌を題しける其歌に云
書き置は片見ともなる筆の跡
我は何くの土となるらん

かくて宗次は荘内の役に戦死しける其板壁は衆兵の題書長く残りし故本府侯少年の徒遠路を歴て來り見る者多かりしとぞ就中て平田宗

(7) 橋口晋作「江戸時代末期の地誌に見る庄内の乱—庄内軍記との関わり等—」『鹿児島県立短期大学地域研究所年報』一六、一九八八年。

次が題詠を見る老少となく皆感泣を催しけるとかや

これによれば、慶長四年（一五九九）、島津氏の家臣であった伊集院忠真が反旗を翻した、いわゆる「庄内の乱」の際に、討伐にあたる兵士が敷根村の薬師堂に集まり、思い思いの文字を落書きしていた中で、平田三五郎宗次という美少年が、辞世の句としてこの歌を薬師堂の天井に書き付けたという。ここにみえる「薬師堂」とは、「門倉薬師」とも呼ばれ、薩摩藩の三薬師のひとつであった。明治の廃仏毀釈により、医師神社となった。現在の鹿児島県霧島市敷根門倉坂入口にある医師神社がそれである。

平田三五郎の物語は、明治時代初期に『賤のおだまき』という名で硬派学生に愛読されていた、男色の物語である。森鷗外の『キタ・セクスアリス』にも、平田三五郎の物語が、硬派学生の間で競い合うようにして読まれていた様子が描かれている。

さて、この歌の話が仮に事実であるとすれば、「かたみ」の歌は、平田三五郎が作った歌ということになる。しかしそれは事実ではありえない。すでにみたように、この歌は元龜二年（一五七一）の段階で、すでに土佐の善楽寺に落書きされており、平田三五郎が書いたとされる慶長四年（一五九九）の時点ですでにこの歌は存在しているのである。すなわち、平田三五郎とこの歌の結びつきは、もっと後の時期になってからであると考えなければならぬ。

事実、平田三五郎が登場する物語の初期のものと思われる『庄内軍記』（一七世紀末頃成立か）には、「件の二人首途して賊部へ赴く時辻堂に逍遙して平田三五郎宗次、吉田大藏清家共に庄内一戦の旅の赴くと堂の柱に書付けるこそ末の世までも留りて其身は苔の下に朽ち野外のちりとなりぬれど、佳名は身後に残りつつ見る人袖を絞り得ず」とあり、辻堂の

柱に書き付けたという記述はあるが、それが「かたみとなれや筆のあと」という歌であったとは明記されていない。

このことから、一七世紀末の時点では、平田三五郎の物語と「かたみ」の歌はまだ結びついていなかったと推定される。おそらく、もともと薬師堂に書かれていたこの歌が、一九世紀前半頃に平田三五郎の物語と結びつけられていったのではないだろうか。

では、もともとこの歌を薬師堂に書いたのは誰なのか。これまでの事例をふまえると、一六世紀後半から一七世紀前半ごろにこの薬師堂に訪れた参詣者である可能性がきわめて高い。『三国名勝図絵』によれば、薬師堂は天正四年（一五七六）に再建されたとあるから、再建後に訪れた参詣者であろう。おそらく、もともと近世初頭頃に参詣者が書いたこの落書きが、後代になって、平田三五郎の物語と結びついたのではないだろうか。

この「かたみ」歌は、薩摩地域においてさらに変容をとげてさまざまな説話の中に登場するのであるが、詳細な紹介は前稿にゆずる⁹⁾。ここでは、戦国末から近世初頭に全国の巡礼者たちによって知られ、こぞって仏堂に落書きされていた歌が、一九世紀以降、その意味が忘れ去られ、別の意味を付加されていた点を確認しておきたい。このことは逆に、一六世紀後半から一七世紀前半という限定的な時期に、この歌が集中的に全国の仏堂に落書きされていたことを示していると思う。

こうした事例は、これまでまったく確認されてこなかった。無名な歌が、巡礼者によって約百年間にわたり全国の仏堂に落書きされることの意味は何なのか、この歌はどのようにして広まっていったのか、なぜこの歌ばかりが書きつけられたのか、など、この事実が投げかけた課題は多い。さらには、中世末に成立した地方霊場を、「一般に地方性と辺陬

(8) 『庄内軍記 全』都城史談会、一九七五年。

(9) 三上注(5)論文。

性とに阻まれて、狭溢な信仰圏を擁するに過ぎず、地方性を脱却し、広範な巡礼を吸収するのは頗る難事であった」と評価してしまつてよいのか、あらためて考えなければならぬ。むしろ筆者には、全国の巡礼者たちによる情報伝達の凄まじさがみてとれるのだが、今後とも類例を積み重ねるとともに、歴史学、国文学、民俗学などによる学際的な研究が望まれるところである。

三 仏堂墨書の空間性

さて、このほかに仏堂内部における落書きとして特徴的なものをあげておきたい。それは、仏堂の落書きの中に、男色の風を窺わせるものが存在することである。

墨書の中に、「あらあら恋しや」というフレーズがしばしばみえる。

〔若松寺観音堂〕

・あらゝゝ「こいしや(内陣)

・あらゝゝ「御こいしや」□□さま」ひかしねむら(内陣)

〔護徳寺観音堂〕(新潟県阿賀町)

・あらゝゝ「御こへし」やな井与三」兼十さまの」ひくわんわれ」

五月書之(仏壇東外側奥間)

・あら御恋しやふれる」米五郎殿 かやうに申」物者奥州の住人か

くにて」申物にて候、さい口おくもの(斗墨書)

このほかにも護徳寺観音堂には、「若もしさま恋しやのふのふ」や、「水沢住人、津河住人、二平弥五郎□□天下一之若もしさま□□□□こんちやう来せのために一夜ふし申度存候、かやうに申物ハ黒川之住人佐藤かへもんあきすならぬ佐藤富衛□□」など、「若もし」(美少年)に対する思いを書いたものが数多くみられる。ちなみに若松寺観音堂墨書には、

(10) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1982年、四七三頁。

全体の釈読が困難だが「若衆」「此一夜ふし申度候」と読めるものがあり(内々陣)、護徳寺観音堂と同じフレーズがあるのが確認できる。

藤木久志氏が指摘するように、これらの墨書は中世に盛んだった男色の風を示すものである¹¹⁾。男色の風をうかがわせる墨書は、他にも新潟県松茸神社の墨書にもみえ、仏堂墨書に頻出するパターンの一つといえるだろう。仏堂空間と男色の風とは、一見結びつきがたいようにも思えるが、むしろ当時の仏堂墨書の一つの特徴を示すものとして、積極的に評価すべきである。

仏堂空間と「男色の風」との関係で連想されるのは、先ほどとりあげた平田三五郎の物語である。仏堂に落書きされた「書きおくもかたみとなれや筆のあと」の歌と平田三五郎の物語が容易に結びついたのは、仏堂内部という空間に、男色の風を連想させるものがあつたからではないだろうか。

四 仏堂墨書の時代性

最後に、仏堂墨書の時代性についてまとめておきたい。すでに再三ふれているとおり、若松寺観音堂など、地方霊場の仏堂の落書きの多くは、一六世紀後半から一七世紀前半の百年間に集中しているように思える。むしろ精査したわけではないので断定はできないが、しかしながらこの時期に共通の記載様式による落書きが行われていたことは、もはや動かしたい。

山形県内の仏堂墨書を例にとってみても、やはり一六世紀後半から一七世紀前半の時期に集中する。とくに興味深いのは、観音霊場ともいうべき「観音堂」に、当該期の巡礼者の落書きが多く残されていること

(11) 藤木注(2)論文、藤木久志「境界の世界・両属の世界」『戦国史をみる目』校倉書房、一九九五年、初出一九八九年。
(12) 『重要文化財 松茸神社本殿修理工事報告書』一九八二年。

ある。天童市の若松寺観音堂、山形市岩波の石行寺観音堂、山形市蔵王半郷の松尾山観音堂は、いずれも最上三十三観音の霊場である。また、白鷹町深山の観音寺観音堂と飯豊町中の観音堂は、置賜三十三観音の霊場である。

平安末期に成立したとされる西国三十三観音霊場は、室町時代になると、貴族・武士だけでなく、民衆も巡礼に参加するようになった。室町時代の五山禅僧の語録には、西国三十三所巡礼の様子がうかがえる部分がある。

「巡礼の人、道路織るが如し。関市相望む。小簡に「某土某人三十三所巡礼」の字を書きて、これを仏字に貼る」(慧鳳『竹居清事』)

「三十三所の霊異を聞きて、一々巡りてこれに礼す。(中略)爾来

巡礼の人、村に溢れ、里に盈つ。背後に尺布を貼り、書きて曰く、

「三十三所巡礼某国某里」と。関吏譏りて征せず。舟師憐れみてこれに賃せず」(竜沢『天陰語録』)

「国、俗にこれを三十三所巡礼と謂う。洛陽清水寺は其の一なり。

(中略)かれこれ巡りて礼するは、往時と異ならず。若男若女、堂

中に寓宿す」(寿桂『幻雲稿』)

漢文による潤飾はみられるものの、室町時代の十五世紀に、巡礼の人々が西国三十三観音霊場に溢れていた様子が描かれている。

西国三十三観音霊場の影響を受けて、板東三十三所、秩父三十三所をはじめとする三十三札所がやや遅れて全国各地で形成されていく。最上三十三観音霊場もその一例である。その成立をめぐる議論があるものの、最上氏の領国経営と関わって、最上氏が内陸部を平定した天正十二年(一五八四)以降、最上氏の改易以前の二六二二年までの間に現在の形が成立したとする説が妥当であろう。¹³⁾ 観音霊場の落書きは、まさに

¹³⁾ 伊藤清郎「最上氏領国と最上三十三観音霊場」『村山民俗』21、2007年6月

この時期の前後に集中しており、落書きが三十三観音霊場の巡礼と密接に関わっていることがうかがえる。

むろん、三十三観音霊場成立以前から、観音巡礼は行われていた。若松寺に残る納札の中には、西国三十三カ所の巡礼に赴いた地元の者が成就記念に納めた札が残っており、最古の年紀として延徳四年(一四九二)のものが確認されている。¹⁴⁾ 一五世紀末の時点で、若松寺は観音霊場として地域社会の中で強く認識されていたのである。

三十三所巡礼と落書きの関係という点でいえば、次の資料も参考になる。板東三十三観音霊場の二十番札所の西明寺(栃木県益子町)の本堂板壁には、明応三年(一四九四)のものと思われる「板東三十三所巡礼」と書かれた落書きが残っている。さらに同町の地藏院本堂にも、「奥州いく」(伊具)の者が書いたと思われる「板東巡礼之時天正三年(乙亥)五月十五日 同道二人」と書かれた落書きや、

板東卅三所巡礼幸祐

上州箕輪山法峰寺衆分正覚坊

深入禪定

見十方仏

上州住人四島太郎五郎

命禄三壬寅三月三日

といった落書きが残っている。¹⁵⁾ 地藏院じたいは札所ではないが、板東三十三所巡礼にもなって書かれていることが明記されていることは興味深い。

こうした落書きは、落書きというよりもむしろ、巡礼札(納札)の代

¹⁴⁾ 『山形県史 古代中世史料2』一九七九年、『特別展 若松寺の歴史と遺宝—若松観音—三〇〇年のあゆみ—』山形県立博物館、二〇〇七年。

¹⁵⁾ 加藤諄・熊谷幸次郎「中世金石文に関する二三の発見」『日本歴史』八七、一九五五年。なお、清水谷孝尚『観音巡礼のすすめ—その祈りの歴史—』朱鷺書房、一九八三年に、不鮮明だが地藏院の落書きの写真が一部掲載されている。

わりに書かれたもの、と考えるべきかも知れない。その意味で、巡礼者の納札と、堂内への落書きは、密接な関係を持っているといえよう。先に紹介した「書き置くもかたみとなれや筆のあと」の歌が、若松観音堂の慶長十七年の納札と、それとほぼ同時期に書かれたと思われる堂内の落書きに共通してみえるのは、そのことを示している。落書きと巡礼札(納札)は密接な関係にあったと考えてよいだろう。

ところで、巡礼者が落書きをしている様子が、一六世紀後半から一七世紀前半に各地でさかんに作られた社寺参詣曼荼羅の中にみえている。筆者が確認したところでは、葛井寺参詣曼荼羅(大坂、葛井寺蔵)、清水寺参詣曼荼羅(滋賀、中島家蔵)、善峰寺参詣曼荼羅(京都、善峰寺蔵)、成相寺参詣曼荼羅(京都、成相寺蔵)などに、仏堂に落書きをしている巡礼者の姿が描かれている¹⁶⁾。

社寺参詣曼荼羅は、一六世紀後半(初出は永禄十一年)から一七世紀後半(寛文元禄期)という一時期に作られ、まさに「中世から近世へという過渡期の時代的所産」と評価される¹⁷⁾。そしてこの「参詣曼荼羅の時代」と、巡礼者たちが各地の仏堂で落書きをする時期がほぼ重なっていることにも、注意を払わなければならない。それを一言で表現するとすれば、巡礼の世俗化、ということであろうか。

ただ、もう一つ考えなければならないのは、この時期になぜ落書きが盛行したか、という問題である。これについては、江戸時代初期に作られた次の笑い話がひとつの解答を与えてくれることを、前稿でもすでに指摘した¹⁸⁾。

○『醒睡笑』巻之三 文の品々

由緒ありげな女房が、下女などをも連れて清水寺に参詣し、舞台の

(16) 大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社、一九八七年。

(17) 福原敏男「概説」前注書。
三上注(5)論文。

あちこちを歩いては休んでいたが、ちょうどそこへ、矢立を腰にさした巡礼で、素性は侍らしく仁体なのが居るのを見掛けて、下女にいわせるには、「近頃恐縮でございますが、人から参った手紙の返事の代筆を頼む者がありません。どうぞお力添えくださいませ」とたのむ。巡礼はあえて辞退するでもなく、その傍に行くと、女房は懐から用紙を出し、いろいろ希望の文言を注文する。ところがこの巡礼、実はいろはさえ習ったことのない者であったが、今度の西国巡礼に際し、そちこちで楽書する目的で、「筑後の国の住人柳川のなにがし」という字だけ習って来た。ほかには一字も知らない。そこで紙が真っ黒になるほど書いた手紙というのが、どれも全部、「筑後の国の住人柳川のなにがし」だけで、上書きまでこれだったとは、まことに恋のさめる風流であった。(鈴木棠三訳『醒睡笑』平凡社東洋文庫、一九六四年)

『醒睡笑』は、元和九年(一六二二)の序があることから一七世紀前半に成立した作品であり、本稿で紹介している仏堂墨書の事例の時期と重なっている。その点をふまえた上でこの話を讀むと、いくつか興味深いことがわかる。

- ① 巡礼者は、巡礼した寺でいつでも「楽書」できるように、矢立を持っていた。
- ② 巡礼者は、文字がほとんどわからず、「筑後の国の住人柳川何某」というフレーズだけを習っていた。
- ③ 「筑後の国の住人柳川何某」というフレーズは、同時期の現実の仏堂の落書きのフレーズと類似している。

仏堂墨書の書式が定型化する理由がこの笑い話からうかがえる。すなわち、この時期の巡礼者は必ずしも文字に習熟している人ばかりではなかった。あらかじめ、「楽書」に書くべき文字だけを習ったうえで、巡礼にのぞんだ人も多かったのではないだろうか。

仏堂の壁にしばしば「いろはにほへと」などの、一見手習いのような落書きがみられるが、これも、文字に習熟していない巡礼者が手習いとして覚えた文字を書き付けた結果ではないだろうか。つまりは、文字を十分に習熟していない人々による巡礼の爆発的な増加が、「文字を書く」という衝動とともに、定型化された落書きを生み出したのではないだろうか。

おわりに

以上、天童市の若松寺観音堂の落書きから発して、前稿の内容をふまえてつ、戦国末から江戸時代初頭にかけての仏堂墨書を「地域性」「普遍性」「空間性」「時代性」という視角からとらえる試みをした。仏堂の落書きがきわめて豊富な情報を含んでいる歴史資料であることを、あらためて実感せざるを得ない。

月並みにいえば、一五世紀半ば以降の観音信仰の熱狂的な高まりや、一六世紀後半以降の巡礼の世俗化、といった背景が、仏堂の落書きの盛行を生み出したともいえる。しかしながら、それだけでは、この時期にこれほどの落書きが書かれたことの意味は十分に説明できないようにも思う。民衆のレベル、地方霊場のレベルにまで巡礼が行われるようになったこの時代にあって、彼らが文字とどうむきあっていたのか、という問題にも注目することで、落書きの意味をより明確にできるのではないだろうか。この点については、今後の課題としたい。

〔付記〕 本論の内容は、二〇〇八年一月六日に山形大学人文学部内で行われた研究会で報告した。研究会の席上、伊藤清郎、岩田浩太郎、菊地仁、中澤信幸、松尾剛次の諸氏から、有益なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

The Scrawls of Temples and Regional Society in Medieval and Modern Ages of Japan

—An Investigation of the Scrawls of Jakushoji-temple (若松寺) Kannon-do (観音堂) in Tendo City (天童市)—

MIKAMI Yoshitaka

(Associate Professor, History and Culture, Cultural Systems Course)

Jakushoji-temple (若松寺) Kannon-do (観音堂) in Tendo City, Yamagata Prefecture (山形県天童市) has a lot of scrawls (落書き) written by the pilgrims from the end of the Sengoku (戦国) period to the beginning of the Edo (江戸) period (from the latter half of the 16th century to the first half of the 17th century). However, these scrawls have been paid little attention to as a historical resource up to now.

In this paper, the author investigated the scrawls of Jakushoji-temple, and tried to include them as a historical resource of the regional society, by paying attention to their regionality, universality, spatiality, and its age feature of each scrawl.

The author confirmed that scrawls written in temples had a close relationship to a social background, and proved that they were a valuable historical resource for understanding the realities of the pilgrimage and the character of the people in this region of society.